



甲虫ニュース COLEOPTERISTS' NEWS

Sept. 1991

No. 95



釧路湿原における日本未記録のハムシ科甲虫とその発見のいきさつ*

酒井 雅 博

昨夏(1990年8月24日)筆者は、環境庁釧路湿原国立公園管理事務所からの依頼で釧路湿原の調査に赴いた際、釧路市の宿舎において、名古屋女子大学の佐藤正孝教授より、黒地に黄色のストライプのあるきれいな1頭の甲虫を見せられ、科を尋ねられた。見事な色彩のコントラストをもった虫で、筆者にとっても初めて見るものであった。佐藤教授は、筆者よりも20日ほど前から入道し、各地を調査されており、旭川市において同市在住の松本英明、荒木 哲両氏に会った際、両氏から、宮田氏が江別市の越後沼でゲンゴロウ採集を行った時の副産物であるという、この甲虫の同定を依頼されたそうである。一見して日本未記録の種であることを看破された佐藤教授は、コメツキモドキのようだが科が不明であると返答されて、標本を預かってこられたそうである。5mmほどもある体長と目立つ斑紋をもつ、雑甲虫の中では“大型美麗種”といっていようこの種は、平たいけれども細長い体形で、触角に球桿部をもち、大きい小盾板や前胸背板の雰囲気はいかにもコメツキモドキであり、中條道夫博士がマレーシアのバツ洞窟(Batu Cave)から報告された *Thallisellodes* や、Fauna of British India に出ていた *Pharaxonotha* の図が一瞬頭をよぎった。また、今はチビキカワムシ科に入っている *Trogocryptoides* に近い感じも受けたが、厚ぼったい付節をもっているし、また水辺ということでこれは即座に否定できた。もちろんルーペでの観察なので、付節数まで数えようとはしなかったけれども、数えるまでもなくコメツキモドキ

以外には考えにくかった。佐藤教授にはそのようにお答えし、おそらくヨーロッパか北米に近似種がいるはずだから、帰って調べればすぐ判りますよなどとうそぶいたが、科が釈然としないことは確かであり大いに気になる虫であった。

コメツキモドキ科は SEN-GUPTA などの仕事によって科のイメージがだいぶ変わってきているが、Cryptophilinae や Toraminae, Loberinae などの新参者ではなく、従来からあるコメツキモドキの範疇に入る特殊なグループの一員のように思えた。北の方にはよく、熱帯で繁栄しているグループのレリックが寒冷適応をして、祖先的形質を保持しながらひっそり生き続けているものである。そしてその時は、この“気になる”虫がわれわれの手で、しかも釧路湿原ですぐ採集できるとは夢想不到にできなかった。

翌日、例によって水網で精力的に湿原内を掘りまわってこられた佐藤教授は、夜、採集品を整理していて、「酒井君これは……」といって絶句された。なんとこの虫が数頭管瓶から出てきたのである。それはその日の夕刻、釧路湿原東部にある岩保木(いわぼつき)水門周辺で掬った採集品の中に含まれていた。採集時はすでに薄暗くなっており、水網の中の虫は手当たり次第吸水管に吸い込んだり、採集時の詳しい状況は判然としなかった。

われわれの車が、次の日の朝一番に、岩保木水門に向かったのはいうまでもない。採集場所が判っていたので、追加標本を得るまでに時間はさしてかからなかったが、さりとて決して多いものでもなかつ

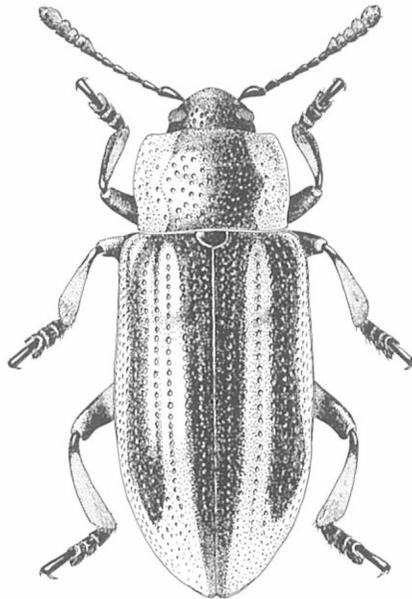


図1. *Prasocuris phellandrii* (LINNAEUS)
キスジホソハムシ

* SAKAI, Masahiro, On a Chrysomelid Species New to Japan Found in Kushiro Marsh (Coleoptera, Chrysomelidae)

た。佐藤教授は水辺を草ごとガッサガッサと大胆に掬って、数頭を追加されたがどこに潜んでいたのかさっぱり判らない。そのうち、やはりこの水門付近で見つかるゲンゴロウモドキや *Helophorus*, *Hydroporus*, *Agabus* などの珍種採集に夢中になって、この虫の調査はもっぱら筆者がすることとなった。岩保水門への導入水路は水門付近では広く、水門は閉じられたままなので、流れはほとんどない。水は比較的澄み、水底は泥質で、岸辺はカヤのようなイネ科植物(のちにトダシバと判明)でびっしりと覆われ、背丈以上も生い茂るキタヨシ群落や、イソツツジ、ワタスゲなどの低生植物を伴ったミズゴケ湿原の景観とは、かなり趣を異にする、二次植生の群落である。佐藤教授とは反対の岸に移って、岸辺の草を注意深く観察したが虫は見つからない。水辺の草を水中に踏みしだいて水面を凝視していると、ときたま浮んでいるのが見つかるのである。このような探索が1時間ほど続いて、やっとのことで水際の際のトダシバの幹にしがみついているこの虫を見つけ出した。その後、葉上に静止する個体と、水中から生えたトダシバにも見いだされ、これら3頭は生かしたまま持ち帰った。トダシバは岸辺の水中から土手の中腹まで生えていたが、水際から少しでも離れるとこの虫はもう発見できなかった。トダシバに食痕らしいものは見つからなかったが、水辺にはトダシバ以外にはオオヨモギがわずかに混じるくらいで、トダシバを宿主とし、幼虫が草幹内に食い入るライフスタイルをもつ虫であろうと想像することはまったく自然で、なんの抵抗もなかった。そして宿主をイネ科と決めつけると、この虫がコメツキモドキであることは、もはや自明の理であった。

水際から離れたトダシバにはこの虫は見つからなかったが、見慣れないホソヒラタムシとキスイムシがたくさん落ちてきた。ホソヒラタムシは *Psamoechus* の日本未記録種で、ヨーロッパの *P. bipunctatus* に近いものであることは一目瞭然であったし、キスイムシの方は、出発前、久松定成先生がいておられたヨーロッパとの共通種 *Atomaria mesomelaena* であろうこともその場で判った。このなんの変哲もない植物に、筆者の住む四国では想像もできないこれだけの虫がいることに、行ったこともないヨーロッパを感じて、感慨深かった。釧路湿原とはなんたる所ゾ!

一週間の調査を終えて、愛媛に帰ると早速このコメツキモドキを調べた。VILLIERSとARROWをずっと当たり、SEN-GUPTAももちろん調べてみたが該当するようなものにはまったく当たらない。驚いたことに、コメツキモドキ(従来)の自体、日本と中国を除くと旧北区にはウスリー地方に *Anadastus* が1種知られているだけで、あとはまったく分布していないのである。また北米でも、コメツキモドキ相はきわめて貧弱であった。平べったい体形で先端5節が徐々に広がる触角球桿部をもつこと、前胸背板は基部でくびれず、基部側溝が消失傾向にあると

いう点ではアフリカの *Barbaropus* 属の種によく似ていたが、無理してフランス語の記載を読むまでもなく、どこかで見たことのある特異な口器の形態は、如何なる既知のコメツキモドキとも歴然と異なっていた。少なくとも族以上のレベルで区別されるべき違いである。“コメツキモドキだとすれば新族を作らなければならない!”しかし今コメツキモドキをそこまで勉強する気はなかったし、そんな余裕もまったくなかった。興味はすぐに今回得た、*Psamoechus* や *Atomaria mesomelaena* をヨーロッパ産のものと比較すること、湿原の調査に入る前、羅臼の海岸でみつけたイワハマムシや、知床山中で得た *Eucillodes* (マルハナノミダマシ科) の新種の方に移っていった。

湿原から生かしたまま持ち帰ったこの虫は、きわめて不活発ではあったが、フィルムの透明ケースに入れたまま、ときどき水を補給してやるだけで10月まで活動していた。10月からは釧路の気候を想定し、冷蔵庫の中に移した。その後は時に生きていることは確認していたが、そのままずっと放置してあった。すっかり暖かくなった今年(1991年)の4月25日、トダシバの芽吹きも始まっているのではないかと思い、この虫をきちんとした飼育容器に移すべく大学の研究室に持ち込んだ。フィルムケースの蓋を開け、始めて生きた状態のこの虫を顕微鏡下でみた。冬眠明けの虫は、昨年(1990年)の10月までと違って結構活発に動いた。触角を上を持ち上げて歩く様を見て「おやっ」と思い、その付節を見た瞬間一瞬閃くものがあった。『えっ! ハムシだ!』。付節に縮小した第4節を発見できなかったわけでもなく、また爪節の前節が大きく張り出しているわけでもなかった。事実この虫の爪節前節には *Phytophaga* 特有のあの広がりが見られないことはすでに知っていた。普通は注意して見ることもない付節第1節と第2節のずんぐりした広がり具合がコメツキモドキではなく、どことなくハムシ的なのである。ハムシに思いがいたると、あの特異な口器はまさしくハムシのそれである。目の前にあった Hatch の *The Beetles of the Pacific Northwest* を開いて2~3ページめくっただけでこの虫の図が出てきた。説明文に“... on emergent aquatic vegetation...”とある。さらに“In Europe the larvae live in the stems of *Cicuta* (water hemlock)...”と続く。やはり手の届くところにあった *Coléoptères de France* を開くと、そのページに原色図が載っていた。ハムシと判れば、この種が *Prasocuris phellandrii* (LINNAEUS) であって、ヨーロッパから北米にまで分布し、水辺の植物につくということが判るまで2分とかからなかったのである。

科不明の甲虫を同定する際に、付節を調べるのは常識であり、鉄則である。もちろん調べなかったわけではなく、前述のように、爪節前節がハムシのように広がっていないことは見ていたし、顕微鏡下ではどうしても見えない縮小した第4節を確認す

るために、付節のプレパラート標本を作る必要性をすぐに感じていた。しかし結局は、付節にせよ口器にせよ、門外漢のくせに真面目に調べなかったのが悪かったであろう。調べる順序もいけなかった。なにも VILLIERS や SEN-GUPTA から調べることなく、すなわちヨーロッパやアメリカの図鑑を眺めればよかったのである。そしてもっと早く《わからないときはハムシ》の格言を思い出せば、人騒がせをすることもなかった。

不幸にもわれわれが釧路湿原で変なコメツキモドキを採ったということは、昨秋の鞘翅学会の談話会でつい口をすべらせてしまっている。そうでなければ、なにもあわててこのような原稿を長なが書くことも無難なかった。

本種は全北区系の種であり、日本のものだけが亜種を異にするほど違っているとは考えにくいので、まだ国外の標本との比較が済んでいないが、ここに速報的に発表しておきたい。またきわめて特徴的な斑紋パターンをもった種なので、全形図を示すだけで、形態記載はごく簡略にしておく。ヨーロッパ産、できればアメリカ産の標本とも比較したのち、必要あれば再記載を行いたい。本種はまた中国北部からも記録があり、それに対して GRESSITT & KIMOTO (1963) はその真偽を問題にしているが、今回の北海道からの記録と、シベリアにも分布していることを勘案すれば、中国からの記録は事実である可能性が強い。和名はマサカハムシとかマサニハムシなどはつけない。目立たないようにキスジホソハムシとしておこう。

Prasocuris phellandrii (LINNAEUS)

キスジホソハムシ (新称)

Chrysomela phellandrii LINNAEUS, 1758, Syst. Nat., ed. 10, p. 376.

Prasocuris phellandrii: WEISE, 1884, Ins. Dtschl., 6 (3): 531.

体長: 49-52 mm. 黒色で前胸背板両側、各上翅中央と側縁部の2縦帯、腿節基半部、基部を除く脛節、第5腹節の大部分はいくぶんオレンジがかった黄色。背面は光沢が強く無毛、腹面は点刻を密に装い、立ち気味の軟毛で覆われる。複眼は背腹に細長い。触角は先端5節が球桿をなし、第2-6節は細く、第7節(球桿部第1節)は不相称でロート状に広がる。

検視標本: 9頭(内2頭は5月2日現在生存中)、岩保木水門、釧路湿原, 26, 29. viii. 1990, 酒井採集; 6頭, 同地, 25, 26. viii. 1990, 佐藤採集; 1頭, 美濃, 動物園付近, 釧路湿原, 7. viii. 1985, 佐藤採集; 1頭, 越後沼, 江別市, 13. v. 1990, 宮田採集。

Phellan- 69. *C. oblonga nigra*, thorace elytrisque lineis duabus luteis. *Fw. fovec.* 438.
Habitas in *Phellandrio aquatico*.

図2. キスジホソハムシの原記載

本種は、ヨーロッパではそう稀な種ではないようで、LINNAEUSの15語の記載文中(図2)にすでに“aquatico”なる文字がみえる。ホストも早くから判っており、Fauna Germanica (1912)には、ドクゼリなど水辺に生育する3種のセリ科植物が書かれている。だとすれば、筆者が釧路湿原で観察したトダシバは、どうも真のホストではないようだ。日本産のものがなにをホストにしているのか確認する必要がある。

脱稿後、佐藤教授より、1985年に釧路湿原を訪れた時の紙包標本を調べ直したところ、動物園付近の水辺ですでにこの甲虫を1頭採集されていた由ご連絡いただいた(検視標本のデータ参照)。もしかすると、北海道の水生昆虫屋さんにとっては、この虫の存在は以前から周知の事実だったのかも知れない。また昨今のゲンゴロウ・ブームが、水中だけでなく、水際に固有の、クリプティックな甲虫の発見に対しても一燈を掲げてくれたのであれば、いかなるブームにもつねに乗り損ねている筆者にとっても、ゲンゴロウ・ブームだけはあながちすてがたい気がしてくるのである。

謝辞: 筆をおくに当たって、この虫を調べるきっかけを与えていただき、種々ご教示をいただいた名古屋女子大学の佐藤正孝教授、文献その他に関して大変お世話になった愛媛大学農学部昆虫学研究室の宮武睦夫、久松定成両先生、また現地での調査に際し、いろいろの便宜を計っていただいた環境庁釧路湿原国立公園管理事務所の小坂橋延弘所長、幸丸政明総括湿原管理官、岩澤 忠氏に心より感謝の意を表す。また、国立科学博物館の友國雅章氏を通じて、同博物館の金井弘夫博士にトダシバの同定をお願いした。記して両氏に厚く御礼申し上げる。

参考文献

ARROW, G. J., 1910. The Fauna of British India, including Ceylon and Burma, Coleoptera, Clavicornia. 416 pp. (reprinted ed. in 1976, New Delhi)

AUBER, L., 1976. Atlas des Coléoptères de France, Belgique, Suisse, Tome II. (4th ed.), 219 pp., Paris.

GRESSITT, J. L., & S. KIMOTO, 1963. The Chrysomelidae (Coleoptera) of China and Korea, Part 2. Pacific Insects Monograph, 1B: 301-1026.

HATCH, M. H., 1971. The Beetles of the Pacific Northwest, Part V: Rhipicerioidea, Sternoxi, Phytophaga, Rhynchophora, and Lamellicornia. 662 pp. Washington.

LINNAEUS, C. VON., 1758. Systema naturae per regna tria naturae secundum classes, ... ed. 10, 824 pp.

中根猛彦, 1974. 北海道で発見された未記録の小甲虫数種. 釧路市立郷土博物館々報, (228): 27-29.

REITTER, E., 1912. Fauna Germanica, IV. 236 pp. Stuttgart.

WINKLER, A., 1924-1932. Catalogus Coleopterorum regionis palaearcticae. 1698 pp. Wien.

(愛媛大学医学部)

○名古屋市におけるウンモンテントウの記録

ウンモンテントウ *Anatis halonis* LEWIS は愛知県では東三河地方においてのみ記録されているが、筆者は尾張地方の名古屋市で採集したので報告する。

1頭、名古屋市昭和区鶴舞公園、25. iii. 1991、筆者採集・保管。頻死の状態と同公園内の歩道に落ちていたのを採集した。

穂積¹⁾によるとウンモンテントウは愛知県ではやや山地性で東三河地方にのみ報告がある。そのうち



平地の豊川市における1例は意外であるとしているが、今回も愛知県の山岳地方からは遠く離れた名古屋市での記録である。穂積(私信)によるとウンモンテントウはシラカバにつくアブラムシを食するというが、同公園内にはシラカバはなく、どこで発生したものかは不明である。

終りに御教示頂いた穂積俊文博士に深謝する。

参考文献

穂積俊文(1990). 愛知県の甲虫類(II), 愛知県の昆虫(上), 232-308.

(名古屋大学医学部老年科学, 内藤通孝)

○横浜市緑区の平成のカミキリムシ

〈田園都市線甲虫シリーズ その5〉

昭和が終り、平成の世となった。横浜市緑区北部の一大採集地であった赤田地区(あざみ野, 荏田, 大場町にまたがっていた)も狂乱地価の犠牲となって昭和とともに消え去り、平成が始まった1989年以後のラベルのついた緑区のカミキリムシは、今後貴重な資料になると思われる。平成の世となっても生きながらえているデータを残すべく、いくつかのカミキリムシの採集例を報告する。

ホソトラカミキリ 1頭、緑区大場町、4. vi. 1989、大木 裕採集。採集地は90年夏に伐採され、今は昔の面影はない。

セミスジコブヒゲカミキリ 1♀、緑区鉄町、9. vi. 1990、大木 裕採集。ゴミムシの採集地として有名なクリの林である。

センノキカミキリ 1♂、緑区大場町、4. viii. 1990、

大木 裕採集。90年の伐採地。

サビカミキリ 1♂2♀♀、緑区大場町、4. viii. 1990、1♀、緑区大場町、8. ix. 1990、大木 裕採集。マツの倒木上に多数いた。

コブスジサビカミキリ 1頭、緑区荏田北、13. v. 1989、大木 裕採集。

カッコウメダカカミキリ 1♂1♀、緑区大場町、4. vi. 1989、2♀♀、緑区鉄町、大木 裕採集。

緑区では今のところ、必ず採れる虫である。

ベニカミキリ 1♂、三保市民の森、1. v. 1990、2♀♀、緑区鉄町、9. vi. 1990、大木 裕採集。ミズキやクリの花上に採集。

チャボヒゲナガカミキリ 3♂♂2♀♀、三保市民の森、大木 裕採集。三保ではミズキの材上に多数いた。

クリサビカミキリ 1頭、緑区大場町、4. vi. 1989、1頭、緑区大場町、8. vi. 1989、大木 裕採集。緑区の手入れしていないクリ林では、どこでも多く見られたが、減ってきている。

ナカジロサビカミキリ 1頭、緑区大場町、19. v. 1990、大木 裕採集。

ヒメヒゲナガカミキリ 1♂、緑区荏田北、23. vi. 1989、1♀、緑区大場町、19. v. 1990、大木 裕採集。採集地は90年に消滅したが、三保や新治ではかなり採れるものと考え。

ヒシカミキリ 1頭、緑区新治町、19. v. 1990、大木 裕採集。まだ当分安定して採集できそうである。

ニセリンゴカミキリ 1頭、緑区大場町、4. vi. 1989、大木 裕採集。スイカツラが群生していれば確実に見られ、1日20頭近くいたこともあったが、最近では緑区北部に関してはごく一部に限られているものと思われる。

(横浜市緑区, 大木 裕)

○ミヤマオオハナムグリを四国より記録

黒澤(1985)により西日本におけるミヤマオオハナムグリ *Protaetia lugubris* (HERBST) の分布は疑問視された形となったが、城戸(1990)は九州における本種の生息を確認した。筆者はナガゴミムシ採集の目的で四国を訪れた折、偶然本種を採集することができたので報告したい。

1♂、愛媛県面河村黒森峠付近、31. viii. 1988、筆者採集。

舗装道路上に静止していたもので、晩夏ではあったがさして古い個体とも思えなかった。四国においても九州同様ムラサキツヤハナムグリ *P. cataphracta* ARROW との記録の見直しが必要と思われる。

末文ながら標本の同定並びに発表をお勧めくださった黒澤良彦博士に厚くお礼申し上げる。

参考文献

城戸克弥(1990). 九州産ミヤマオオハナムグリについて、甲虫ニュース、(92): 10.

(群馬県伊勢崎市, 須田 亨)

佐渡島のヒメハナカミキリ類 —セスジヒメハナカミキリを中心として—

窪木幹夫

佐渡島はサドコバヤハズカミキリやサドマイマイカブリなど本土産とは異なる形態を持つ昆虫が棲息することで知られている。新潟海岸から西方 32 km の日本海上に横たわる面積 857 km² の佐渡島は日本で二番目に大きな島である。地形的には、北西部の大佐渡山地（最高峰金北山 1,172 m）、南西部の小佐渡山地（最高峰大地山 646 m）、中央部の国中平野からなる。低地、丘陵地帯は標高 200 m くらいまでスダジイ、ウラジロガシ、アカガシ、タブノキ、ヤブツバキなどの暖温帯常緑広葉樹が生育する。標高 200~1,000 m は、ミズナラ、ブナなどの冷温帯落葉広葉樹で、標高 1,000 m 以上にはミヤマナラ、イチイ、ハクサンシャクナゲなどの亜寒帯の植物が見られる。

佐渡島産のヒメハナカミキリ類を調べる機会があったので、その結果を報告する。ただし、分類学的検討は別の論文に譲り、ここでは触れない。成虫はタニウツギ、サワフタギ、ヤマブキショウマ、ヤグルマソウ、ハクサンシャクナゲの花より採集された。

1. ナガバヒメハナカミキリ *Pidonia (Pidonia) signifera* (BATES)

41♂♂21♀♀, 金井町新保, 11. vi. 1988, 鈴木和利採集; 3♂♂2♀♀, 妙見山, 18. vi. 1988, 中林博之採集; 75♂♂36♀♀, 金北山, 22-23. vi. 1991, 窪木幹夫採集。

対岸の守門岳保久礼（標高 800 m）と浅草岳只見沢（標高 600 m）の個体と比較して、雌雄とも上翅斑紋や中・後肢腿節の黒色部が発達する。特に、雄の上翅の Lb, Lm, Lp 各紋が大きく、4 割の個体でこれら 3 紋が連結する。このような個体の S 紋は太く、先端は小楯板手前で消失せず、細く小楯板に沿って延び、前胸基部に達する。雄の腹面は全体が

黒色で、先端 1~2 節の中央部が赤褐色を呈する。

2. *Pidonia (Pidonia)* sp.

3♂♂1♀, 金井町新保, 11. vi. 1988, 鈴木採集; 1♀, 妙見山, 18. vi. 1988, 中林採集; 13♂♂11♀♀, 金北山, 22-23. vi. 1991, 窪木採集。

本種は従来ヒメハナカミキリと言われ、*P. mutata* (BATES) の学名が与えられていた。佐渡島産の個体は上翅斑紋の発達が著しく、九州、四国、本州産に較べて黒色部が最も発達する。雌雄とも中・後胸部は黒色、雄の腹部は黒色で、先端 1~2 節の後縁が赤褐色を呈する。本文では、従来使用されてきたヒメハナという和名を便宜的に用いた。

3. セスジヒメハナカミキリ *Pidonia (Cryptopidonia) amentata* (BATES)

48♂♂20♀♀, 金井町新保, 11. vi. 1988, 鈴木採集; 4♂♂2♀♀, 大佐渡スカイライン下部, 18. vi. 1988, 中林採集; 78♂♂38♀♀, 金北山, 22-23. vi. 1991, 窪木採集。

日本産ヒメハナカミキリの中で最も分布の広い種の一つで、北海道、本州、四国、九州と周辺のウルップ島、利尻島、粟島、佐渡島、隠岐島に分布する。上翅斑紋の地理的変異が著しく、2 亜種に分けられる。基亜種は広く西日本地域から中部地方の太平洋側、さらに関東地方から東北地方の阿武隈山地に棲息する。亜種 *kurosawai* は北海道、東北地方から中部地方の日本海側に棲息する。亜種 *kurosawai* は基亜種に較べて、前頭中央溝がより深く、雄の末端節腹板の凹みがより深く、上翅の黒紋が退化し、S 紋が普通小楯板手前で消失し、上翅基部に達しない。佐渡島のセスジヒメハナは雌雄とも上翅 S 紋が大きく、基部に達している（図 3, 4）。雄の中には小楯板付近で S 紋が細くなる個体もあるが、Lp 紋がよく発達し、基亜種の特徴が認められた。対岸の山形、

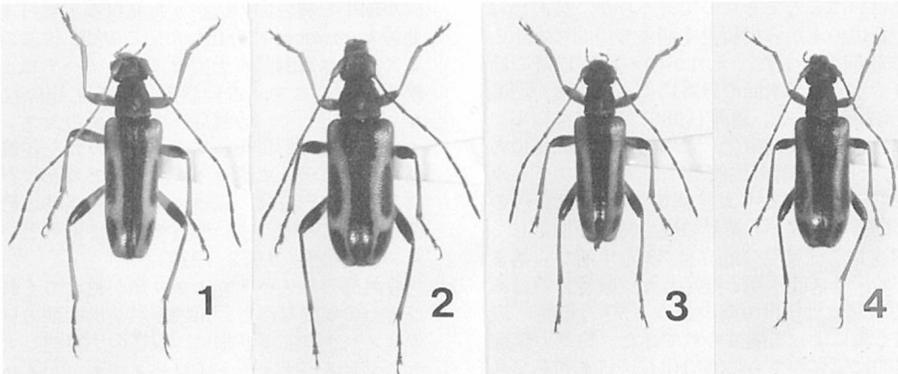


図 1~4. セスジヒメハナカミキリ *Pidonia (Cryptopidonia) amentata* (BATES). 1, 2: 山梨県大月市小金沢産, 3, 4: 新潟県佐渡郡金北山産, 1, 3: 雄, 2, 4: 雌。

新潟両県の標本, たとえば飯豊山温身平, 守門岳保久礼, 柏崎市大清水観音, 妙高高原燕温泉惣滝(標高1,200 m)は亜種 *kurosawai* の特徴を持っていた。佐渡島のセスジヒメハナは対岸の新潟県の個体群が亜種 *kurosawai* であるのに, 表日本地域に分布する基亜種に近い特徴を持っていた(図1, 2)。

4. チャイロヒメハナカミキリ *Pidonia* (*Mumon*) *aegrota* (BATES)

20♂20♀, 金井町新保, 11. vi. 1988, 鈴木採集; 5♂2♀, 大佐渡スカイライン下部, 18. vi. 1988, 中林採集; 47♂42♀, 金北山, 22-23. vi. 1991, 窪木採集。

雄の腹部1~2節が黒ずむ個体が約6割あった。

佐渡島に棲息するヒメハナカミキリ類に共通した特徴に次のような点を指摘できる。

①種数が少ない。今後の調査で新たな追加種があるかもしれないが, 対岸の守門岳, 浅草岳の標高500~1,000 m 付近の6月の調査(それぞれ一日のみ)では, ヒメハナカミキリを9種採集している(窪木, 未発表)。佐渡島で記録されている4種以外に, ミワヒメハナ *P. miwai*, ムネアカヨコモンヒメハナ *P. masakii*, キベリクロヒメハナ *P. discoidalis*, マツシタヒメハナ *P. matsushitai*, アサマヒメハナ *P. takechii* が含まれていた。佐渡島にはブナ林があるにもかかわらず, これらブナ林で生活をするヒメハナカミキリがいない。特に, 裏日本地域に分布するミワヒメハナ, ムネアカヨコモンヒメハナ(退色型), アサマヒメハナのようなブナ林への依存の高い種が佐渡のブナ林にはいない。

②全国型(窪木, 1987)の広域分布種が棲息する。佐渡島産の4種は九州の四国, 本州, 一部の種は北海道にも分布する種である。

③垂直分布が厚い。ヒメハナの垂直分布がやや高いが, いずれの種も林があれば標高200 m くらいの低山帯から1,000 m を超える山地帯まで生息する。4種とも環境適応能力を十分に発揮している。

④対岸の本州日本海側地域に較べて, 上翅斑紋, 肢, 腹部の黒色部が発達する。

佐渡島はいつごろできたのであろうか。佐渡島は第三紀中新世の末から洪積世中期までの間に本州と陸続きの時期があった。それが中~後期以降の断層, 浸食や氷期の海面の昇降によって陸橋が消滅し, 佐渡海峡ができた。藤澤(1983)は佐渡島にギフチョウが分布しない理由に, この地質学的知見にあてはめて, 60万年前の佐渡島の成立がギフチョウの侵入を妨げたと推定した。樋熊(1964)は粟島の昆虫相の固有の程度から粟島の成立時代を推定し, これに関連して佐渡島の成立は38万年前から始まるミンデル・リス間氷期と推定した。数値に差はあるが, 佐渡島は洪積世中期の始め(50万年前)以後, 本州と海によって隔てられてきた。約6万年前から世界的に気候がさらに寒冷化し, 日本列島でも日高山脈や飛騨, 木曾, 赤石山脈にも山岳氷河が発達し, 北海道から中部地方にかけて, 広い地域が周

氷河地域となった。約1.8万年前の最終氷期極盛期の日本付近の海面低下量については約-130~-140 m と推定されている。仮に最も海面低下量が大きかった-140 m とすると, 日本列島の周辺の大陸棚はかなりの面積にわたって陸化した。しかし, 最浅部で209 m の海底で隔てられている佐渡島はこの海面低下でも本州と接続しなかったと推定されている。佐渡島のヒメハナカミキリは洪積世中期から本土の個体群と隔離されてきた。流木によって本土のヒメハナカミキリが佐渡島に流れ着いた可能性はないだろうか。幼虫が材部に食坑道を造り, その中で生活するフタオビトラカミキリ(大野, 1975)に代表されるトラカミキリ類や大型ハナカミキリ類では可能性がある。ヒメハナカミキリの幼虫は樹皮下から樹皮部を食べて材部に食坑道を造らない。乾燥や気温の低下で幼虫は樹皮下から出て腐植土に入ってしまう(窪木, 1989)。雌はある程度腐朽し樹皮が剥げやすくなっている材に産卵する。これらの習性を考えると, ヒメハナカミキリが流木によって分布を拡大する可能性はないであろう。

佐渡島のセスジヒメハナが新潟県本土とは異なり, 表日本地域の基亜種に似ているのはなぜであろうか。ヒメハナカミキリ類の上翅黒紋については, 次のような考え方が提唱されている(窪木, 1987)。歴史的に, ヒメハナカミキリ類の上翅は黒紋の発達したタイプから, 黒紋が縮小し黄色部の広がったタイプへ変化した。さらに黒紋は上翅の外表皮(exocuticle)内のメラニン顆粒であることを確認し, 成虫が受ける太陽光の輻射熱の吸収から考えて, 黄色部の広がったタイプの方が明環境下での活動に有利であると推定した。この考えに立ててセスジヒメハナの分化過程を考えてみると, 佐渡島が本土とつながっていたと推定される洪積世中期以前には上翅の黒色部の広い原セスジヒメハナが広く分布していた。海峡の成立による佐渡島の形成により, セスジヒメハナが本土から佐渡島に隔離された。本州のセスジヒメハナは, その後上翅黒紋が縮小するが, 比較的黒紋が残った西日本・表日本地域の基亜種と黒紋が縮小し黄色部の広がった北日本・裏日本地域の亜種 *kurosawai* に分化した。この間, 佐渡のセスジヒメハナは新潟県本土のセスジヒメハナほど黒紋の縮小を起こさず, 古い形質である上翅黒紋が残った。結果として, 佐渡島と太平洋側のセスジヒメハナがよく似た形質を示すようになった。佐渡島産のウスバシロチョウやヤマキマダラヒカゲなどにみられる特異な形質は, 隔離により分布当時の形質が保存されたもので, 古い形質の表現であるという指摘もある(樋熊, 1972, 1977)。

佐渡島のヒメハナカミキリ類が教えてくれるもうひとつの重要な点は, 第四紀洪積世中期の日本列島のヒメハナカミキリ相に, 現在のナガバヒメハナ, セスジヒメハナ, チャイロヒメハナ, ヒメハナに繋がる種がいたということである。新潟県本土の標高500~1,000 m 付近のブナ林ではミワヒメハナは優

占種であり、ムネアカヨコモシヒメハナ、アサマヒメハナも棲息する。これら佐渡島には分布しない種は第四紀洪積世中期以降に新潟県域にその分布を拡大したと考えられる。これは40種を超える日本産ヒメハナカミキリ類の種分化がいつごろ起きたかを考える上でも重要である。種数ではあまり魅力のない佐渡島のヒメハナカミキリ類は、日本列島のヒメハナカミキリ相形成の過程を解明する上で一つの重要な資料になるであろう。

末尾ながら、この報文をまとめるにあたり、貴重な採集品を下下さり、採集地の環境や採集状況について教えていただいた鈴木和利、中林博之、塚田潤、文献の入手でお世話になり、佐渡の昆虫について教えていただいた長岡市立科学博物館の山屋茂人の各氏に厚くお礼申し上げる。

参考文献

藤澤正平 (1983). ギフチョウはなぜ佐渡島に棲まないのか。

昆虫と自然 18 (2) 2-6.
 種熊清治 (1964). 生物地理学に見た粟島の昆虫相. 長岡市立科学博物館研究報告, (3): 1-132.
 —— (1972). 佐渡島のヤマキマダラヒカゲ. 同誌, (7): 11-20.
 —— (1977). ウスバシロチョウの前翅長にみられる地理的変異. 新潟の自然, (3): 217-226.
 窪木幹夫 (1987). 日本の昆虫⑤ヒメハナカミキリ, 171 pp + 8 pls. 文一総合出版, 東京.
 —— (1989). ヒメハナカミキリの幼生期の生活—ミミズと いっしょに採れたカミキリ幼虫—. 昆虫と自然, 24 (9): 13-17.
 湊 正雄・井尻正二 (1976). 日本列島 第三版 岩波書店, 209 pp.
 —— (1973). 目でみる日本列島のおいたち. 60 pls. 築地書館, 東京.
 大野正男 (1975). 北日本におけるフタオビミドリトラカミキリの分布. 甲虫ニュース, (25/26): 3-4.
 (東京都世田谷区)

西表島におけるオオイチモンジシマゲンゴロウの記録と形態に関する知見

北 山 昭

日本産オオイチモンジシマゲンゴロウは長らく *Hydaticus pacificus* AUBÉ が用いられ、本州産はやや大型で上翅側方が幅広く黒点混じりの黄褐色となり、中央付近では不規則な縦条となることから ssp. *conspersus* RÉGIMBART として東南アジア、ニューギニア産と区別されてきた (中根猛彦 1963, 1964; 佐藤正孝 1985). また西表島産については原名亜種として扱われてきた (佐藤正孝 1985). ところが中根 (1990) は日本産を *H. pacificus* から独立させ *H. conspersus* RÉGIMBART とし、さらに西表島産を ssp. *sakishimanus* NAKANE とした。

本種は稀な種と考えられ、特に西表島の記録は非常に少ない。筆者は本種を下記のように採集しているので記録しておく。

1♂: 沖縄県西表島古見付近, 1991. Mar. 8, 北山昭採集, 保管. (図 A-1)

古見付近にあるおそらく人工と思われる透明度の高い池より得られた。この池はすり鉢状であったが周囲には植物があり、ほかにフチトリ、ヒメフチトリ、オキナワスジ等が採集できた。

この個体の特徴を以下に記載しておく。体長 14.7 mm, 体幅 8.1 mm, やや細長い。頭胸背, 触角, 口枝

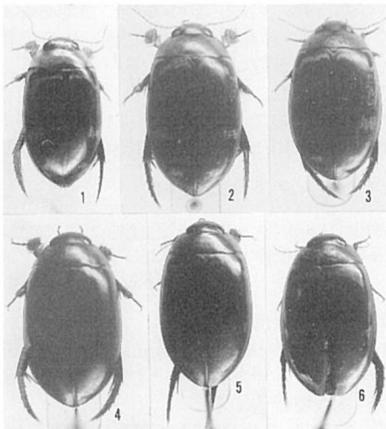


図 A. 各産地のオオイチモンジシマゲンゴロウ. 1: 西表島産♂; 2: 埼玉県産♂; 3: 埼玉県産♀; 4: 宮城県産♂; 5: タイ国チェンマイ産♂; 6: タイ国チェンマイ産♀.

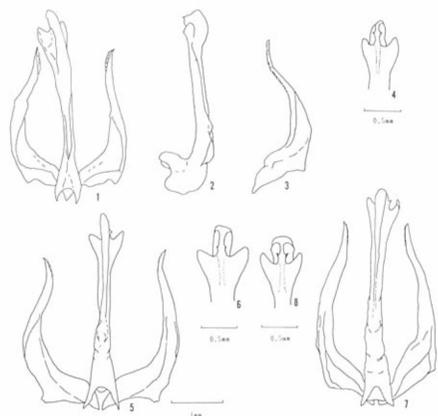


図 B. オオイチモンジシマゲンゴロウ♂交尾器. 1-4: 西表島産; 5-6: 宮城県産; 7-8: チェンマイ産 (1, 5, 7: 中央片, 側片背面; 2: 中央片側面; 3: 側片側面; 4, 6, 8: 中央片先端部腹面).

表 オオイチモンジシマゲンゴロウの各産地間の比較

産地	性	体長(mm)	体幅(mm)	上翅点刻列	上翅、前胸背 光沢	上翅斑紋の 境界	♂交尾器中央片の 先端部棘状突起
西表島	♂	14.7	8.1	やや明瞭	やや強い	不明瞭	真横を向く(図B-4)
埼玉県	♂	16.9	9.5	やや不明瞭	弱い	不明瞭	—
埼玉県	♀	16.3	9.1	不明瞭	弱い	不明瞭	—
宮城県	♂	17.0	9.4	やや不明瞭	やや弱い	不明瞭	真横を向く(図B-6)
タイ	♂	16.0	9.0	明瞭	強い	やや明瞭	前方を向く(図B-8)
タイ	♀	15.8	9.2	明瞭	強い	明瞭	—

は黄褐色。複眼内側、前胸背前縁中央、後縁中央に黒紋がある。体下面は前胸の大部分と上翅側片が黄褐色であるのを除いて暗赤褐色。各腹節の側方には黄褐色紋がある。肢は中肢脛節、付節および後肢が暗赤褐色、ほかは黄褐色。上翅は黒色で側部および基部後方、中央後方、翅端付近に黄褐色紋があり、中央外方にも黄褐色の雲状紋を散らしている。これらの特徴は大きさ以外本州産の♂とよく一致しているが、ただ上翅の印刻は非常に細かく光沢はかなり強い。また点刻列は3列で一番外側のもの以外比較的明瞭である。交尾器は他の *Hydaticus* 属と同様に中央片は細長く、かつ側片の中央部が中央片から大きく離れている。側片の先端部内側は細かく疣状となる。中央片先端部は極めて特徴的で三叉状となる(図B-1,4)。先端部腹面には一対のよく骨化した棘状突起があり真横を向く(図B-4)。なお今回阿部光典氏のご好意により埼玉県、宮城県産およびタイ産の個体と比較することができた。他産地との比較を表に示す。

上記の特徴を総合すると、検討できた個体数が少ないため分類学的な扱いについて断言は避けるが、西表島産はタイ産よりむしろ本州産に近いものと思われる。また交尾器の形態からは日本産とタイ産の差異は少なく、別種であるとしても非常に近縁なものであると考えられる。いずれにしても佐藤(1988)が指摘するように本種(*H. pacificus* AUBÉ)の分布は広く、かなり変異の幅があるらしいので分類に関して再検討を要するものと考えられる。

末筆ながら本州産およびタイ産の標本をご恵与くださり種々ご教示を賜った阿部光典氏に感謝する。

参考文献

- 中根猛彦(1963). 原色昆虫大図鑑 II: 60.
 中根猛彦(1964). 甲虫学小誌, (3): 9-10.
 中根猛彦(1990). 昆虫と自然, 25 (1): 28-30.
 佐藤正孝(1985). 原色日本甲虫図鑑 II: 195-196.
 佐藤正孝(1988). インセクトリウム, 25 (1): 11.
 (大阪府吹田市)

○ヒメオビキノコゴミムシダマシを石垣島で採集

ヒメオビキノコゴミムシダマシ *Platydemia nigropictum* NAKANE は、今までに本州、九州、対馬、屋久島から分布が知られているが、筆者は石垣島で採集しているので新たな生息地として記録しておく。

6頭、石垣市登野城付近, 29. ix. 1990.

上記採集地一帯は林道延長工事のため林が伐採され、多数の倒木が放置されており、その中の直径1mを超えると思われる広葉樹の倒木から本種を採集した。
 (東京都世田谷区, 沢田和宏)

○多摩川河口でキバナガミズギワゴミムシを採集

キバナガミズギワゴミムシ *Bembidion yokohamae* (BATES) は神奈川県川崎産の個体により1883年BATESにより記載された河口付近の汽水域にのみ生息する特殊なミズギワゴミムシである。従ってその産地は非常に限られている。その後の神奈川県からの報告はないようである。しかし東京湾沿岸では東京都荒川、千葉県小櫃川河口で採集されている。大田区が多摩川河口は原産地に最も近く、発見の可能性は笠原氏により予想されていた。今回採集された場所は1982年に同類のキバナキバナガミズギワゴミムシ *B. aestuarii* S. UÉNO et HABU が採集され

た場所とまったく同じで、筆者もその後1984年と1985年に同地で採集を試みたが、キバナキバナガミズギワゴミムシは採集できたが本種はまったく発見できなかった。今回、6年ぶりに当地をおとずれたところ幸運にも本種を多数採集したので報告する。しかも以前多数いたキバナキバナガは5頭しか採集できなかった。本種がどのようにして定着したのか興味深いものである。19♂♂44♀♀、東京都大田区東六郷多摩川, 30. iv. 1991, 和泉敦夫採集。

参考文献

- 笠原須磨生(1984). 「大田区の歩行虫類」大田区自然環境保全基礎調査報告書 p 66, p 132.
 (東京都大田区, 和泉敦夫)

○ヘリハネムシ北海道で採集

ヘリハネムシ *Ischalia patagiata* LEWIS は北海道の記録がないようであるが、下記のとおり道東で採集しているので報告する。

1頭、網走支庁東藻琴村藻琴山中腹, 16. vii. 1988, 筆者採集保管。記録にあたり発表を勧められた旭川市の松本英明氏に感謝する。

(旭川市, 荒木 哲)

キタセンチコガネについて

黒澤良彦

本誌 93 号に藤岡昌介氏が、北海道から記載されたキタセンチコガネ *Geotrypes amoenus* JACOBSON, 1893 について解説し、「この種は日本の昆虫相から除外しておくのが妥当であると思われる」と結んでいる。私も原則として藤岡氏の説に賛成であるが、なぜ大陸産の種類が日本産として誤って記載されたのか、また、果して北海道にはいないのかの 2 点をもっと詮索する必要があるような気がする。

本種は従来朝鮮半島からは記録がなく、藤岡氏も朝鮮半島に本種が産することについては全く触れていないが、国立科学博物館には下記の標本がある。

2♂2♀, 咸鏡南道漢岱里, 16. viii. 1939, 寺島新一採集, 黒澤良彦寄贈。

4 頭共に背面は美しい赤紫色, 体下は紫色で肢の腿節のみが美しい藍色を帯びる。この色調は JACOBSON (藤岡氏の JACOBSON は誤り) の *Geotrypes amoenus* (原記載の *Geotrypes* はロシア文字による誤植と思われる) の体色に大体において一致する。

2♂♂, 咸鏡北道冠帽峰, 鹿野忠雄採集, 鹿野忠雄コレクション。

故鹿野忠雄博士の採集品であるが、採集年月日不明, 恐らくは 1935 年頃の採集品と思われる。背面は美しい青藍色ないし紫藍色, 体下と腿節は青藍色ないし緑藍色, 紫色は帯びない。一見, 日本のルリセンチコガネやヤクシマセンチコガネに似る。

1♂, 咸鏡南道篠田, 16. vii. 1932, 黒澤良彦寄贈。

冠帽峰産のものに近い色調をしているが、全体に光沢が失せ、前脛節の外歯が磨滅した老個体。

1♀, 咸鏡南道赴戦高原, 20. vii. 1939, H. ANDO 採集, 渡辺博信氏寄贈。

体の背面も腹面も冠帽峰産のものに似た色調をしている。

以上の 5♂♂3♀♀ であるが、その産地のほとんどが赴戦高原地域に集中するのは興味がある。恐らく同地域では本種はそう稀な種類ではないであろう。

また、国立科学博物館には旧満洲を含む中国産の下記の標本がある。

2♂♂, 旧満洲ヤプロニヤ, 27. vi. 1940, N.I.

NIKITIN 採集。

上記の冠帽峰産の 2 頭によく似ているが、小型で背面はやや暗く藍色味が微弱, 青味が強い。腹面は冠帽峰産と大差がない。

1♂, 旧満洲ウロリー, 1. viii. 1944, 河野広道採集, 河野広道コレクション。

ヤプロニヤ産に似ているが、背面は緑藍色。腹面は緑青色, 腿節は金緑色を帯びる。これまでの諸産地の個体は上翅の間室が隆起し横皺がほとんどなかったが、この標本では縦溝に沿って微弱な横皺が認められる。

1♀, 北部大興安嶺 (興安省) 漠河~老溝, 16. vii. 1942, 今西探検隊採集。

ウロリー産の 1♂ に近いが、暗化し、黒色の地に青味を帯び、青味は緑色によって強弱がある。腹面は暗青色, 腿節は青藍色, 上翅の間室の横皺は上記のどの個体より強い。

1♂, 山西省潞安, vi. 1940, 鈴木孝太郎採集, 白畑孝太郎コレクション。

1♂, 山西省長子門, vii. 1940, 鈴木孝太郎採集, 白畑孝太郎コレクション。

共に故白畑孝太郎 (旧姓鈴木) 氏が従軍中に山西省東南部の太行山脈中で採集した貴重な標本で、同地域は採集家が全く訪れたことのない未踏査地域である。2♂♂ 共に大型で滑沢, 上翅の横皺がほとんどない。色調はヤプロニヤ産の 2♂♂ に似ているがやや暗く、長子門産の 1♂ は多少北朝鮮の漢岱里産のものに似た紫色の光沢がある。

以上の諸標本から総合すると、北部大興安嶺産の 1♀ は、*baicalicus* REITTER, 1892, そのものと見做してよいであろう。漢岱里産の 2♂♂2♀♀, 冠帽峰産の 2♂♂, 篠田産の 1♂, 赴戦高原産の 1♀ など北朝鮮産のものはいずれも *amoenus* JACOBSON, 1893 と考えられ、特に漢岱里産のものは *amoenus* の基本型に当たると考えられる。旧満洲の北東部のものは、東部のヤプロニヤ産の 2♂♂ は *amoenus* に含めてよいと思うが、ウロリー産の 1♂ は色調こそ *amoenus* に似ているが、体形や上翅の皺からは

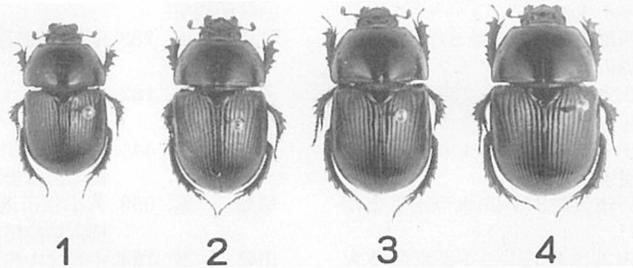


図 1~4. キタセンチコガネとその近似種。1. *Geotrypes stercorarius* (LINNÉ, 1758) (イギリス産), 2. *G. baicalicus* REITTER, 1892 (北部大興安嶺産), 3. *G. b. amoenus* JACOBSON, 1893 (北朝鮮漢岱里産), 4. *G. b. amoenus* JACOBSON, 1893 (山西省潞安産)。

baicalicus に近く、両者の中間的なものに見える。山西省産の2♂♂は体形や上翅の皺からは、明らかに *amoenus* で *baicalicus* ではない。旧満洲北部と山西省の間に本種の産地が知られていないが、恐らく大興安嶺の中南部から内モンゴルにかけては *amoenus* に属する種類が分布しているであろう。*Baicalicus* と *amoenus* が別種であるか、同一種内の地域変異であるかは、シベリア産の標本をまだ見ていないので断言は出来ないが、大興安嶺北部のものが確かに *baicalicus* に当るものであるならば、両者は同一種内の地理的変異と考えてよいであろう。

以上の観点からすれば、バイカル湖の東部の地域(トランスバイカル地方)から大興安嶺の北部にかけて分布する *baicalicus* は東漸または南漸するに従って次第に大型で青味が強くなり、上翅間室の皺は逆に弱くなる傾向を持っていると考えられる。朝鮮半島の一部には、さらに色調が赤紫色になる地域があり、この様なものに *amoenus* と名付けられたのであろう。しかし、この様な *amoenus* が日本にいないとは、単に樺太に産しないことだけを理由に、断言することは早計である。エゾヒメシロチョウ、ジョウザンシジミ、ウスバキチョウ、アサヒヒョウモンなどの例を挙げるまでもなく、甲虫でも、セスジアカガネオサムシ、エゾアオタマムシ、ナガカメノコテントウなど、北海道と朝鮮半島北部、シベリア東部などに共通して産するものに、樺太からは全く記録のない種類が数例知られている。恐らく、*amoenus* JACOBSON, 1893 は、北朝鮮の漢岱里産のもののように、美しい赤紫色の個体に命名されたもの

であろうが、その様な色調のものを産する地域が、ソ連領の沿海州やアムール地方にもあるとは考え難い。模式標本は1889年(明治22年)8月に採集されたものであるから、日朝併合以前に採集されたものである。従って、戦前の日本人が採集した標本のラベルによく見られる、朝鮮も樺太も台湾もすべて「Japan」と表示したラベルが付いた標本であったとは考えられない。この産地の誤認(?)がどうして惹起されたのであろうか、今後解明されるべき問題であろう。

なお、藤岡昌介氏の報文の文献の中には、下記の重要な文献が脱落しているので追加しておく。

三輪勇四郎・中條道夫, 1939. 日本産鞘翅目分類目録, 金亀子虫科, 94 pp. 台北, 野田書房.

31頁に *Geotrupes (Geotrupes) stercorarius* LINNÉ var. *amoenus* JACOBSON, 1895, キタセンコガネがある。分布は, Japan (Hokkaido), South and East Siberia となっている。*Amoenus* にキタセンコガネと云う和名が付けられたのも、日本の文献に *amoenus* JACOBSON が登場したのも、共にこれが最初である。しかし、この文献の中で命名された年を1895としてあるのは1893の誤りである。

私の考えでは、ヨーロッパに分布する *G. stercorarius* (LINNÉ, 1758) と *G. baicalicus* REITTER, 1892 とは別種であるが、*baicalicus* と *G. amoenus* JACOBSON, 1893 は同一種内の地理的変異である。この場合、*baicalicus* の方が先に記載されているから、*amoenus* JACOBSON, 1893 は *baicalicus* REITTER, 1892 の亜種である。(東京都世田谷区)

◇会員動静◇

◎新入会

- 相場 博明 180 武蔵野市吉祥寺東町2-8-2
橋本慎太郎 249 逗子市逗子4-7-30
林 寛次 770 徳島市八万町川南59-3
堀川 正美 245 横浜市戸塚区原宿町 大正団地1-7-103
L. HROMADKA Anny Letenske 7, CS-120 00, Praha 2, Czechoslovakia
稲田 建一 259-11 伊勢原市三ノ宮1235-2メゾンマイネル107
伊藤 勝彦 082 河西郡芽室町東7条6丁目
加藤 敏行 090 北見市栄町26栄ハイッ2号
岸本 年郎 156 世田谷区桜丘1-1-1東京農業大学昆虫学研究室
松本 慶一 156 世田谷区桜丘1-1-1東京農業大学昆虫学研究室
成田 行弘 310 水戸市大町3-3-20水戸市立博物館
新津 修平 156 世田谷区桜丘1-1-1東京農業大学昆虫学研究室
西村 正賢 196 昭島市中神町168-6
小野 直史 120 足立区千住5-24-12

- 佐久間邦彦 155 世田谷区代田1-35-3
曾根信三郎 307 結城市結城西繁昌塚 日本特殊農薬結城中央研究所殺虫剤研究室
渡辺 光行 336 浦和市瀬ヶ崎2-14-8-105
山地 正博 197 秋川市草花3670-64
◎再入会
中山 裕人 301 竜ヶ崎市下町4858-2サンライフ岩佐203号
石田 勝義 468 名古屋市天白区久方1-148相生山団地3-201
◎住所変更
江崎功二郎 783 南国市物部乙200高知大学農学部林学科造林学教室
芳賀 馨 182 調布市富士見町4-19-1電源開発武蔵野寮
長谷川道明 441-31 豊橋市大岩町字大穴1-238豊橋市自然史博物館
早瀬 猛 053 苫小牧市港町1-6-15合同庁舎内横浜植物防疫所苫小牧出張所
川原 誠 164 中野区中央1-50-4-2-203
河合 隆平 577 東大阪市稲田本町3-31-33
川下 貴 100-21 小笠原村父島字西町
木附 嘉理 257 秦野市鶴巻538

沖縄本島・石垣島・西表島の水生甲虫類 (続き)

松井英司

Family Hydraenidae ダルマガムシ科

39. *Limnebius* sp.

沖縄本島: 大宜味村饒波川 (7 頭, 16.), 名護市源河川 (31 頭, 16.); 石垣島: 栄 (21 頭, 5.), 嘉良川 (22 頭, 6.), 嵩田 (13 頭, 12.); 西表島: 古見 (17 頭, 9.)

Family Hydrochidae ホソガムシ科

40. *Hydrochus japonicus* SHARP, 1873 ヤマトホソガムシ

石垣島: 明石 (1 頭, 6.); 西表島: 干立 (1 頭, 8.), 古見 (3 頭, 9.)

Family Hydrophilidae ガムシ科

41. *Coelostoma stultum* (WALKER, 1858) セマルガムシ

沖縄本島: 本部町宇茂佐 (3 頭, 17.); 石垣島: 栄 (1 頭, 5.), 大野 (9 頭, 6.), 久宇良 (1 頭, 6.), 明石 (1 頭, 6.), 大里 (3 頭, 12.), 底地 (2 頭, 12.); 西表島: 南風見田 (4 頭, 7.), 古見 (20 頭, 9.)

42. *Paracymus evanescens* SHARP, 1890 チビマルガムシ

沖縄本島: 大宜味村喜味原 (4 頭, 16.), 本部町宇茂佐 (27 頭, 17.); 石垣島: 伊原間 (1 頭, 5.), 栄 (12 頭, 5.), 大野 (1 頭, 6.), 久宇良 (3 頭, 6.), 明石 (8 頭, 6.), 底地 (7 頭, 12.), 嵩田 (21 頭, 12.), 大里 (12 頭, 12.), 名蔵 (1 頭, 13.); 西表島: 南風見田 (20 頭, 7.), 祖納 (4 頭, 8.), 古見 (21 頭, 9.)

43. *Laccobius nakanei* GENTILI, 1982 オキナワシジミガムシ

沖縄本島: 大宜味村饒波川 (10 頭, 16.), 名護市源河川 (113 頭, 16.), 大宜味村平南川 (15 頭, 16.)

44. *Helochares abnormalis* (SHARP, 1890) コクロヒラタガムシ

沖縄本島: 本部町宇茂佐 (5 頭, 17.); 石垣島: 栄 (4 頭, 5.), 大里 (1 頭, 12.), 嵩田 (1 頭, 12.); 西表島: 古見 (1 頭, 9.)

45. *Helochares anchoralis* SHARP, 1890 アカヒラタガムシ

沖縄本島: 本部町宇茂佐 (26 頭, 17.); 西表島: 大宮 (1 頭, 7.), 古見 (5 頭, 9.)

46. *Helochares ohkurai* M. SATÔ, 1976 クロヒラタガムシ

石垣島: 栄 (1 頭, 5.), 大里 (8 頭, 12.), 底地 (1 頭, 12.); 西表島: 古見 (10 頭, 9.)

47. *Helochares pallens* MACLEAY, 1833 ルイスヒラタガムシ

沖縄本島: 本部町宇茂佐 (46 頭, 17.); 石垣島: 栄 (7 頭, 5.), 伊原間 (4 頭, 5.), 大野 (1 頭, 6.), 明石 (5 頭, 6.), 平久保川 (3 頭, 6.), 底地 (7 頭, 12.), 嵩田 (6 頭, 12.), 大里 (1 頭, 12.),

名蔵 (11 頭, 13.); 西表島: 南風見田 (1 頭, 7.), 祖納 (7 頭, 8.), 干立 (1 頭, 8.), 古見 (39 頭, 9.)

48. *Enochrus simulans* (SHARP, 1873) キイロヒラタガムシ

沖縄本島: 大宜味村平南川 (2 頭, 16.)

49. *Enochrus esuriens* (WALKER, 1858) チビヒラタガムシ

沖縄本島: 喜味原 (2 頭, 16.), 宇茂佐 (45 頭, 17.); 石垣島: 伊原間 (3 頭, 5.), 栄 (16 頭, 5.), 明石 (4 頭, 6.), 久宇良 (2 頭, 6.), 大野 (1 頭, 6.), 大里 (3 頭, 12.), 嵩田 (3 頭, 12.), 底地 (4 頭, 12.), 名蔵 (1 頭, 13.); 西表島: 大原 (2 頭, 7.), 祖納 (1 頭, 8.), 干立 (1 頭, 8.), 古見 (97 頭, 9.)

50. *Enochrus satomii* NAKANE et MATSUI, 1986 サトミヒラタガムシ

沖縄本島: 本部町宇茂佐 (2 頭, 17.); 西表島: 祖納 (1 頭, 8.), 古見 (2 頭, 9.)

51. *Enochrus subsignatus* (HAROLD, 1877) マルヒラタガムシ

沖縄本島: 本部町宇茂佐 (10 頭, 17.)

52. *Enochrus uniformis* (SHARP, 1884) ウスグロヒラタガムシ

沖縄本島: 与那覇岳 (15 頭, 16.), 喜味原 (3 頭, 16.), 宇茂佐 (2 頭, 17.); 石垣島: 栄 (12 頭, 5.), 明石 (8 頭, 6.), 久宇良 (1 頭, 6.), 大野 (1 頭, 6.), 底地 (4 頭, 12.); 西表島: 古見 (35 頭, 9.) 沖縄本島からは新記録である。

53. *Enochrus* sp.

沖縄本島: 大宜味村平南川 (27 頭, 16.), 大宜味村饒波川 (13 頭, 16.); 石垣島: 栄 (3 頭, 5.), 嵩田 (23 頭, 12.); 西表島: 古見 (37 頭, 9.)

54. *Hydrophilus bilineatus cashimirensis* REDTENBACHER, 1892 コガタガムシ

沖縄本島: 本部町宇茂佐 (1 頭, 17.); 石垣島: 明石 (1 頭, 6.), 底地 (3 頭, 12.), 名蔵 (3 頭, 13.); 西表島: 古見 (7 頭, 9.)

55. *Sternolophus rufipes* (FABRICIUS, 1792) ヒメガムシ

沖縄本島: 本部町宇茂佐 (23 頭, 17.); 石垣島: 栄 (27 頭, 5.), 伊原間 (6 頭, 5.), 明石 (21 頭, 6.), 久宇良 (4 頭, 6.), 底地 (17 頭, 12.), 底原ダム (3 頭, 12.), 名蔵 (8 頭, 13.); 西表島: 祖納 (12 頭, 8.), 古見 (45 頭, 9.)

56. *Sternolophus inconspicuus* (NIETNER, 1857) ミナミヒメガムシ

沖縄本島: 今帰仁村謝志 (1 頭, 16.), 本部町宇茂佐 (1 頭, 17.); 石垣島: 栄 (6 頭, 5.), 久宇良 (2 頭, 6.), 底原ダム (1 頭, 12.), 底地 (2 頭, 12.); 西表島: 古見 (28 頭, 9.)

57. *Amphiops mater* SHARP, 1873 タマガムシ

- 石垣島: 栄 (18頭, 5.), 明石 (5頭, 6.), 大里 (4頭, 12.); 西表島: 干立 (9頭, 8.)
58. *Regimbartia attenuata* (FABRICIUS, 1801) マメガムシ
 沖縄本島: 本部町宇茂佐 (23頭, 17.); 石垣島: 栄 (4頭, 5.), 明石 (15頭, 6.), 久宇良 (1頭, 6.), 大野 (2頭, 6.), 底地 (5頭, 12.), 名蔵 (9頭, 13.); 西表島: 干立 (13頭, 8.), 祖納 (4頭, 8.), 古見 (45頭, 9.)
59. *Berosus pulchellus* MACLEAY, 1825 ホソゴマフガムシ
 沖縄本島: 本部町宇茂佐 (1頭, 17.); 石垣島: 栄 (18頭, 5.), 明石 (1頭, 6.); 西表島: 古見 (14頭, 9.) 沖縄本島からは, 新記録である.
60. *Berosus fairmairei* ZAITZEV, 1978 オオトゲバゴマフガムシ
 石垣島: 栄 (45頭, 5.), 桃里 (5頭, 6.), 底地 (1頭, 12.), 名蔵 (1頭, 13.); 西表島: 古見 (1頭, 9.)
61. *Berosus indicus* MOTSHULSKY, 1853 シナトゲバゴマフガムシ
 沖縄本島: 本部町宇茂佐 (13頭, 17.); 石垣島: 栄 (72頭, 5.), 伊原間 (10頭, 5.), 桃里 (8頭, 6.), 大野 (5頭, 6.), 明石 (1頭, 6.), 底原ダム (7頭, 12.), 底地 (10頭, 12.), 名蔵 (13頭, 13.); 西表島: 大宮 (9頭, 7.), 祖納 (12頭, 8.), 古見 (148頭, 9.) 沖縄本島からは, 新記録である.
 Family Helodidae マルハナノミ科
62. *Scirtes japonicus* KIESENWETTER, 1874 トビイロマルハナノミ
 石垣島: 大里 (5頭, 12.); 西表島: 古見 (2頭, 9.)
63. *Scirtes sakishimanus* M. SATO et CHUJÔ, 1972 サキシマルハナノミ
 石垣島: 伊原間 (1頭, 5.)
 Family Limnichidae チビドロムシ科
64. *Pelochares ryukyensis* M. SATO, 1966 リュウキュウダエンチビドロムシ
 石垣島: 大野 (2頭, 6.)

引用文献

- 松井英司, 1988. 奄美諸島で採集した水生甲虫類 (1987-1988). 北九州の昆虫, 35 (2): 113-121.
 — 1990 a. 琉球列島で採集した水生甲虫類 (1). 北九州

の昆虫, 37 (2): 69-76.

- 1990 b. 琉球列島で採集した水生甲虫類 (2). 北九州の昆虫, 37 (3): 163-170.
 — 1990 c. アマミマルケシゲンゴロウの全記録. 月刊むし, (238): 25.
 — 1990 d. キオビチゲンゴロウ西表島で発見. 昆虫と自然, 25 (13): 13.
 (熊本県本渡市, 天草農業高校)

◇栃木県産甲虫目録の作成に関するお願い◇

栃木県は LEWIS 以来余りにも有名な好採集地“日光地方”や“渡良瀬遊水池”をかかえ, 多種多様な甲虫相を形成しているだろうと思われています. しかし, 現在のところ甲虫目全般を包括した目録は存在しません. そこでこの度, 栃木県立博物館 (自然課) は3年計画 (H3~H5) で栃木県産甲虫目録の作成を企画しました. この企画には, 当然のことながら我々栃木県在住の虫屋が全面的に協力することになりましたが, 何せ少人数です. より完璧な目録の作成を目指すため, ここに本誌読者諸氏のご協力をお願い致します. 栃木県下での未発表の採集データ, 発表された各種の文献 (特に, 地方の研究會誌・同好會誌) 等の情報についてご協力下さい. 連絡は事務局または大桃までお願い致します.
 事務局: 〒320 宇都宮市睦町2の2 栃木県立博物館自然課 樋口弘道・佐藤光一 Tel 0286-34-1311
 (大桃定洋: 〒329-27 西那須野町千本松 768 農水省草地試験場 Tel 0287-36-0111)

◇『甲虫ニュース』の原稿送付先◇

〒184 東京都小金井市貫井北町3丁目22番1号
 中央大学附属高校生物研究室 妹尾俊男
 TEL 0423(81)5411; FAX 0423(83)4840

日本鞘翅学会

会費 (一ケ年) 5000円, 次号は1991年12月下旬発行予定
 発行人 上野俊一
 発行所 日本鞘翅学会 東京都新宿区百人町 3-23-1 国立科学博物館昆虫第1研究室
 電話 (3364) 2311, 振替 東京 8-401793
 印刷所 (株)国際文献印刷社

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針 00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭ダブル針も出来ました. その他, 採集, 製作器具一切豊富に取り揃えております.

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6
 振替 東京 (3) 21129
 電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)
 F A X (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥6,200, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,870, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3個以下 ¥1,300, 4個以上 ¥850 (以下同様), 第2地帯 ¥1,500, ¥950, 第3地帯 ¥1,700, ¥1,050, 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています. カタログを御請求下さい. (¥60)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25
 電話 (03) 3811-4547, 振替 6-113479